

北海道黒松内町で確認したクモノスゴケ(クモノスゴケ科, タイ類)

乙幡 康之¹⁾・斎藤 均²⁾・綿貫 梓²⁾*Pallavicinia subciliata* (Austin) Steph. (Pallaviciniaceae, Marchantiophyta) found in Kuromatsunai, Hokkaido, JapanYasuyuki OPPATA¹⁾, Hitoshi SAITO²⁾, Azusa WATANUKI²⁾

はじめに

クモノスゴケ *Pallavicinia subciliata* はクモノスゴケ科クモノスゴケ属のタイ類である。クモノスゴケ属は、中肋部が明瞭で1本の中心束があること、葉状体の縁に毛が散生することでクモノスゴケ科の他属から区別される(岩月 2001)。国内における本属は、クモノスゴケモドキ *Pallavicinia ambigua*, ニセヤハズゴケ *P. levieri*, ヤハズゴケ *P. lyellii*, そしてクモノスゴケの4種が知られているが、いずれも本州以南に分布するとされている(岩月 2001)。クモノスゴケとクモノスゴケモドキは、葉状体の縁に細長い細胞から成る3~5細胞の毛状刺を持ち、前者の葉状体は匍匐し先端が細く尖ることがあるのに対し、後者の葉状体は斜上し先端は細くならないことで区別される(岩月 2001, 井上 1976)。

今回、北海道黒松内町(図1)において、クモノスゴケの生育を確認し、本種が北海道に分布することが明らかになったので報告する。

北海道におけるクモノスゴケ

岩月(2001)や井上(1976), Yamada and Iwatsuki(2006)などによると、クモノスゴケは本州以南に分布するとされる。しかしながら、北海道において本種を報告した文献が2例ある。

佐々木(1956, 1959)は、大雪山のタイ類目録の中で本種を報告し(*P. longispina*として)、標高600~1000mに稍普通に見られるとしている。しかしながら、

これらは詳細な生育地が不明であるとともに証拠標本も示されていない。また、両報告のクモノスゴケは同一の産地であると考えられる。なお、佐々木(1976)は佐々木(1959)の再録で、伊藤(1985)のタイ類は佐々木(1976)の再録である。

大雪山国立公園のタイ類については、井上(1988)や湯澤(2008)などの詳細な調査があり、目録が示されているが、いずれにしてもクモノスゴケは確認されていない。

一方、神田(1984)は大雪山国立公園の南東部に位置する然別湖で本種を報告している(ホソナガクモノスゴケ *P. longispina*として)。この標本については、ひがし大雪自然館に収蔵されているため再同定を行った。その結果、報告された標本は2本の中心束を持つことが確認されるため、クモノスゴケではなくエゾヤハズゴケ *Hattorianthus erimonus* であると考えられる。標本ラベルには種名のみが明記され、採集日と採集地については記されていないが、神田(1984)によると1965年5月~1968年10月に然別湖で採集された標本と思われる。

以上のことから、これまで北海道におけるクモノスゴケの記録は大雪山の1例のみ(佐々木 1956)となるが、年代が古いこと、証拠標本が示されていないこと、生育場所が不明なこと、など疑わしい点が多い。今後、大雪山におけるクモノスゴケの生育確認が望まれる。

1) ひがし大雪自然館 〒080-1403 北海道河東郡上士幌町字ぬかびら源泉郷48-2 Higashitaietsu Nature Center 48-2 Nukabira-gensenkyo, Kamishihoro-cho, Kato-gun, Hokkaido 080-1403 Japan
2) 黒松内町ブナセンター 〒048-0101 北海道寿都郡黒松内町黒松内512-1 Kuromatsunai Beech Center 512-1 Kuromatsunai, Kuromatsunai-cho, Suttu-gun, Hokkaido 048-0101 Japan

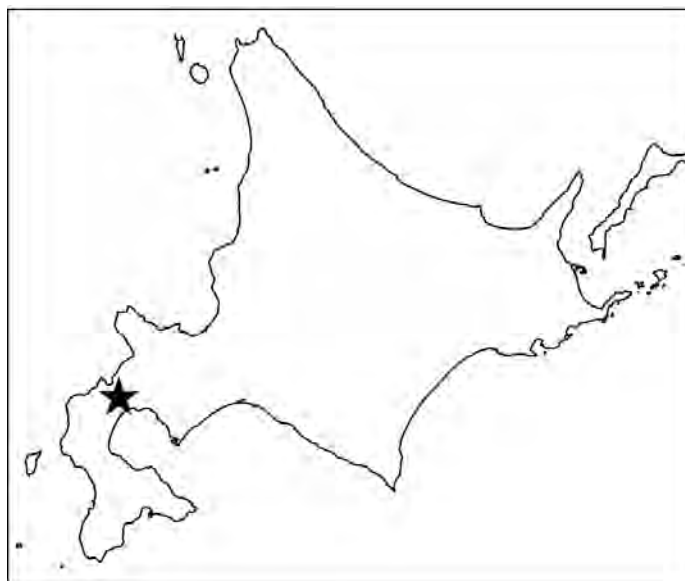


図1. 黒松内のクモノスゴケの産地
Fig.1. Locality map of *Pallavicinia subciliata* in Kuromatsunai

黒松内町のクモノスゴケ

黒松内町は北海道後志支庁管内の南部に位置し、日本海と太平洋に近い。また黒松内低地帯は日本のブナの北限であり、植物地理学的に重要な地域である。

2018年9月16日に黒松内町で行われた「コケの森の観察会」の際に、クモノスゴケを確認した。本種は黒松内町ブナセンター近くにある「ブナの小道」という散策路で、小流沿いに群落を形成していた。群落は10~20cm程度でいくつか点在し、いずれも水際の腐植土上で見られた。また、偽花被は確認できたが、雄包膜は見られなかった。

今回の報告により、北海道の黒松内町にクモノスゴケが分布することが明らかになった。また北海道では約60年ぶりにクモノスゴケの生育が確認されたことになる。なお、北海道以北におけるクモノスゴケの記録は、沿海地方ウスリースク保護区と国後島の2地域で生育が確認されている (Mamontov et. al. 2015)。そのことから、北海道東部においてもクモノスゴケが分布する可能性が高いが、温泉地など地熱が高い環境も視野に入れて調査をする必要がある。

Pallavicinia subciliata (Austin) Steph.

Specimen examined: Japan, Hokkaido Shiribeshi, Kuromatsunai-cho, Buna-no-komichi, 43°38' 57.8" N, 140°18' 26.8" E, 90m alt., on humus, 15 Sep., 2018, Y. Oppata 3698 (Herb. Higashitaisetsu Nature Center).

引用文献

- 井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 193pp. 築地書館, 東京.
- 井上 浩, 1988. 苔類. 北海道土木部「一般道道士幌然別湖線自然環境調査資料(確定)」, pp.47-49.
- 伊藤律子, 1985. 上川町の蘚苔類目録. 上川町の自然生物目録集, 51-60. ※タイ類は佐々木(1976)の再録
- 岩月善之助(編), 2001. 日本の野生植物 コケ. 355pp. 平凡社, 東京.
- 神田啓史, 1984. 東大雪の地衣蘚苔植物フローラ. 東大雪地域生物相, 2:1-18.
- Mamontov, Yu. S., Konstantinova, N. A., Vilnet, A. A. and Bakalin, V. A., 2015. On the phylogeny and taxonomy of Pallaviciniales (Marchantiophyta), with overview of Russian species. *Arctoa*, 24: 98-123.
- 佐々木太一, 1956. 北海道大雪山の苔類目録. 蘚苔地衣雑報, 1(3):4.
- 佐々木太一, 1959. 大雪の苔類. 旭川郷土博物館報告, 2:25-32.
- 佐々木太一, 1976. 大雪の苔類. 上川町の自然, 1:75-82. ※佐々木(1959)の再録
- Yamada, K. and Iwatsuki, Z., 2006. Catalog of the Hepatics of Japan. *J. Hattori Bot. Lab.*, 99: 1-106.
- 湯澤陽一(2008). 北海道東大雪地方の苔類. フロラ福島, 25:39-46.

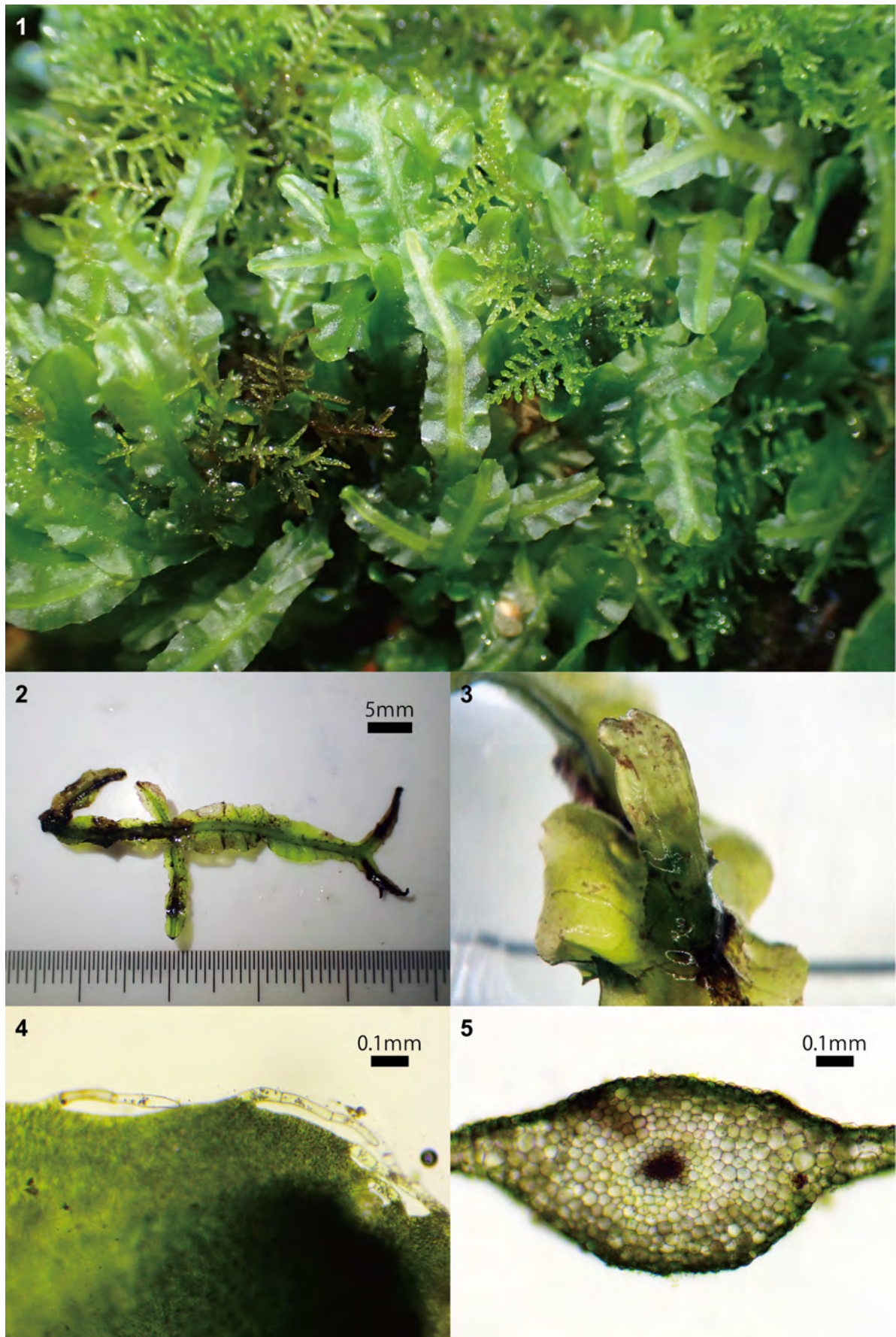


図2. クモスゴケ. 1: クモスゴケの群落 2: 植物体, 3: 偽花被, 4: 葉状体縁の長毛, 5: 中肋付近の横断面
Fig.2. *Pallavicinia subciliata*. 1: Plants growing, 2: Plant, 3: Pseudoperianth, 4: Teeth on thallus margins, 5: Cross section of central strand.

Summary

In Japan, *Pallavicinia subciliata* (Austin) Steph. was supposed to be distributed south of Honshu, but confirmed the growth of this species in Kuromatsunai, Hokkaido, Japan.